



JAくまがや

営農相談員 (TAC)

(東部営農経済センター)

☎048-523-4311

田中 秀樹

森田 友輝

(西部営農経済センター)

☎048-533-3911

山岸 雅臣

(南部営農経済センター)

☎048-536-7911

長原 寛八

新島 匠

(北部営農経済センター)

☎048-589-2911

永倉 恒輝

吉田 正徳

TACは農業者とJAのパイプ役となる総合窓口です。TACが訪問しましたら、ご意見・ご要望はもちろん、JA事業への提言など、何でもお聞かせ下さい。誠心誠意対応をさせていただきます。

お問い合わせについては、
お近くの
営農経済センターへ

小麦「さとのそら」の多収に向けたチェックポイント

小麦の生産は最初が肝心です。以下に多収をあげるためのチェックポイントを整理してみましたので、参考にしてください。

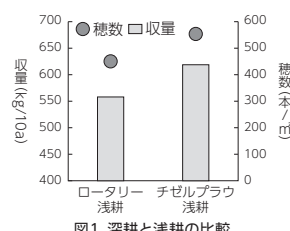
1 耕耘は浅くなっていませんか

近年、成熟期近くなって麦が急速に枯れあがって収量が上がらない「枯れ熟れ症状」が目立つようになってきました。これは作土深が浅く、根張りが浅いこと、出穂期以降の乾燥が原因とされています。

土質にも関係しますが、作土深が15cm以下だと枯れ熟れを起こしやすいとされていますので十分な耕深をとるようにしましょう。

2 排水対策は十分ですか

湿害は麦の根の呼吸や伸長を阻害します。明渠の施工などにより、降雨の後、できるだけ早く表面水を排水できるようにします。また、排水口から確実に排水できるかも点検しておきましょう。明渠は額縁に施工するほか、圃場中央にも縦・横に通しておく効果が高まります。明渠施工する場合は雑草の発生を防ぐため除草剤散布前の施工がお勧めです。



品種「さとのそら」。深耕はチゼルプラウによる深耕。写真は右がチゼルプラウによる深耕、左がロータリーによる浅耕。
(引用元：埼玉県農業技術センターホームページ水田高度利用担当)

3 厚播き・深播きになっていませんか

「さとのそら」の適正播種量は10アール当たり6kgです。厚播きするとかえって減収しやすくなることが判っていますので厚播きを避けましょう。深播きは穂数の減少につながり、「深播き→穂数不足→厚播き」の悪循環におち入りやすくなります。

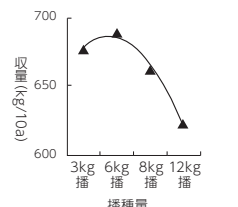


図2 「さとのそら」における播種量と収量
(引用元：埼玉県農業技術センターホームページ水田高度利用担当)

表1 「さとのそら」の播種深度による苗立数と穂数

播種深度	苗立数 (本/㎡)	穂数 (本/㎡)
3cm区	187	763
5cm区	173	653
8cm区	83	472

注) 箕田ら (2013) : 日本作物学会関東支部会報 第28号 40-41pから引用

昔から多収麦の指標として平方メートル当たり穂数600本×1穂粒重1gで反収600kgとされています。「さとのそら」の千粒重は40g程度ですから種子6kgで平方メートル当たり150粒、30cm条間ですと条の長さ1m当たり45粒になります。1粒から4～5本の穂が立ちますので十分穂数を確保できます。「さとのそら」では1穂粒数30粒、1穂粒重1.2g程度が期待できますので、多収をねらうのに十分な播種量です。

4 出芽率を高めましょう

ロータリー等での耕耘・砕土は、粗いと出芽率が低下し雑草も発生しやすくなります。逆に細かすぎても出芽を阻害します。砕土率 (径2cm以下の小土塊の割合) 60～70%を目標にしましょう。播種後、乾いているときは除草剤散布前に麦踏ローラなどで鎮圧すると出芽が早まり、出芽率も高くなります。

湿り過ぎている時に作業すると砕土が上がらないので、無理をせず、乾くのを待つか、荒起こしをして乾燥させてから砕土・播種しましょう。

5 「さとのそら」は後期重点施肥が有利

「さとのそら」では茎立期以降にチッソ吸収が急速に増大することや、茎立期以降の追肥が有効なことが判っています。また、近年は播種後の大雨で基肥の肥料が流亡してしまうといったことが、しばしば生じています。このようなことから、「さとのそら」の施肥基準ではチッソ成分で基肥6kg/10a、追肥は出穂15日前4～6kg/10aとしています。「さとのそら」の茎立期から出穂期までの日数は約1か月なので出穂15日前は茎立期から15日後になります。

作業上、茎立期後の追肥が難しい場合は、早期の追肥は避け、できるだけ茎立ち直前にチッソ成分で3～4kg/10aの追肥をしてください。

6 麦踏みは3～4回

麦踏みは徒長防止や分げつの増加、穂の揃いを良くするなど、様々な効果があるとされています。また、稈を強くすると言われており、確実に実施しましょう。

出芽した麦の葉が2枚以上になれば (2葉期以降) 麦踏みができます。麦踏みをしてから次の麦踏みまでの間隔は最低10日空けてください。

「さとのそら」では収穫時に稈が折れる現象がしばしば見られますが、麦踏の回数を増やすと稈の折れを軽減できる傾向があります。ただし、5回以上麦踏みをする、障害を生じる場合がありますので4回までにとどめましょう。